美術月評

〈8月〉

人間臭さとれ自然に近づく

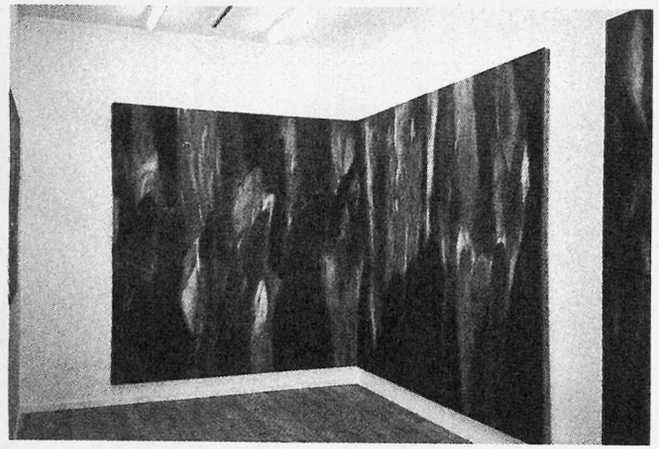
永津禎三展

稲嶺成祚

永津禎三展 一二〇号のキャンバス四枚をセットにした絵二点を含む個展。観客の一人が「森林浴している気分」といったが、いい得て妙だと思った。暗いブルーを基調として視野に余るこれら大作は、ひんやりした肌合いをもってそそり立つ白い岩壁の下を歩くようにも錯覚させた。

永津の仕事は、作品の大小にかかわらず四枚程度のパネルによって成り立っている。大作の場合は、それは運搬や制作の便宜のためとも思われるが、彼の場合はそれだけではない。それぞれの一枚はそれだけで独立するよう工夫されているし、それぞれのパネルは隣のパネルと必ずしも連続した形や色をもってはいないのである。主題となる形や色をもたないので、横へいくらでも増殖していけるし、それでいてまとまった空間を示すのである。

永津の前の仕事には、意地悪な目にも似た不協和で鮮やかな色が、ちらちら覗いていたが、今回の作品にはそれがなくなっている。それだけ人間臭さがなくなって、自然に近付き、スケールが大きくなった。しかし、自然に近付いた分、パンチが弱くなったようにも思う。



UTAKI—Karimata—3・永津禎三